

## 資料紹介 「越路横穴」出土土器

ここに紹介する資料は、東北大学考古学研究室片平標本室において、「越路横穴」とのラベルが貼られた木箱に一括して収められていた土器である。「越路」とは「向山横穴群」一帯の旧地名であり、その名前は現在でも一部地名として残っている。これらの土器は「向山横穴群」内のいずれかの横穴から出土した可能性が高いと考えられるため、東北大学考古学研究室須藤隆教授の御厚意と、同研究室菊池佳子氏の御協力により、実測図及び写真を紹介する(第48図、図版29)。

木箱内の土器は全部で15点あるが、完形品がなく、全て破片もしくは一部破損しており、図示できるのは11点である。1点が土師器である以外は全て須恵器である。「越路横穴 昭和三、四」とのネーミングがあるものと、ネーミングがないものがある。また土師器は、ネーミングはないものの昭和3年4月9日の日付のある新聞に包まれていた。このことから、これらの土器は昭和3年4月に採集されたものと考えられる。実測図の上段は、昭和3年に「越路横穴」で採集されたことがほぼ確実であるもの、下段はネーミングがないものである。

1、2、3、6、7、9、10、11は須恵器フラスコ形長頸壺と考えられる。これらのうち1と2は、接合はしないものの胎土などから同一個体と判断される。頸部破片のうち3と6には、頸部に沈線が巡っている。体部が良好に残るものはなく、体部径は全て復元値である。器面調整は、9のみに回転力キメが施されている他は、口クロナデまたは回転ヘラケズリである。胎土・色調・焼成は同一ではなく、灰白色を呈し緻密なもののや、灰黒色を呈し大粒の砂粒が混入するものなど4種類程が見られ、生産地が異なることが窺われる。

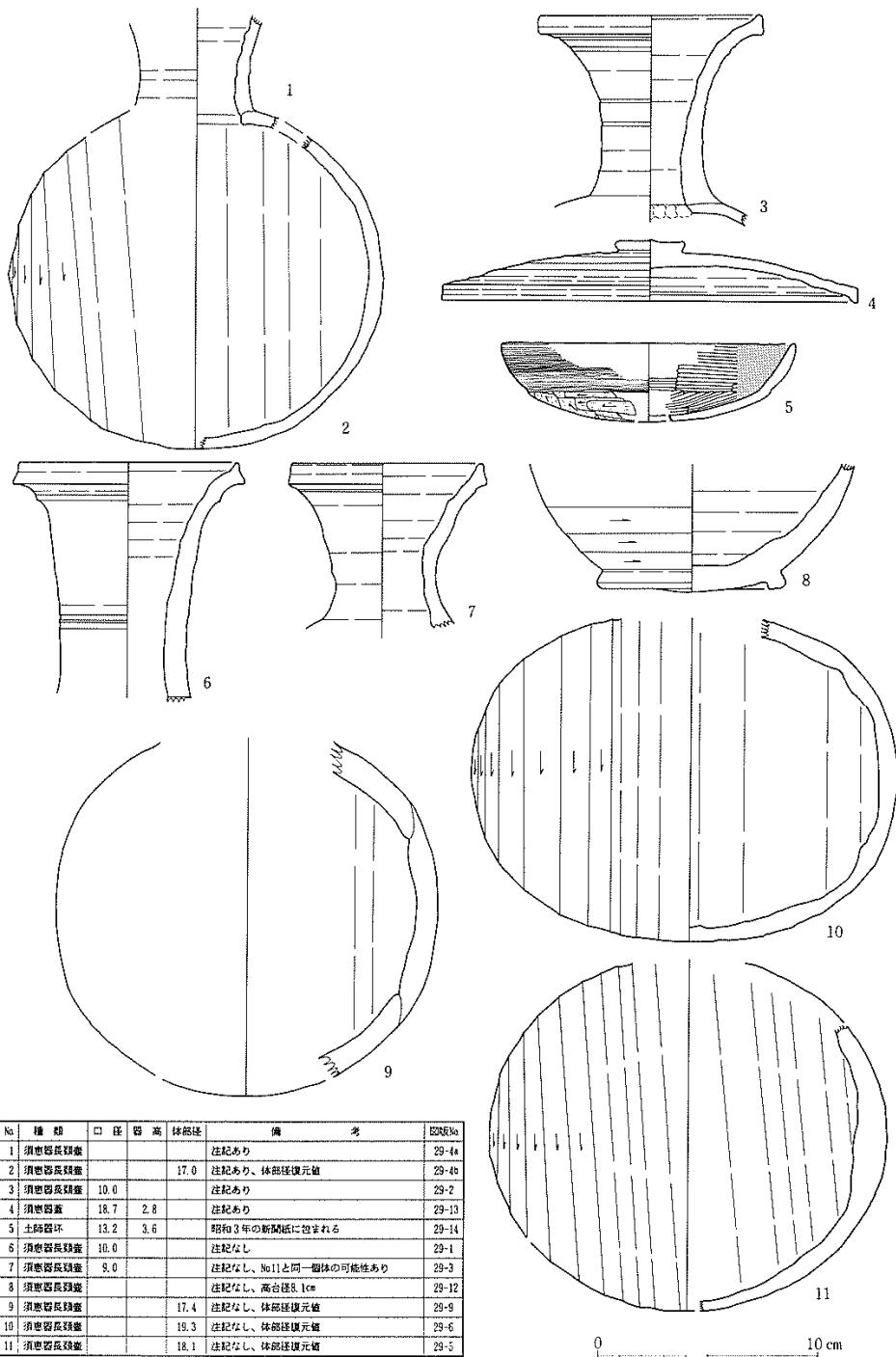
4は須恵器蓋である。口径が約18cmと大型で、器高が低い。内面にカエリはなく、退化した扁平の宝珠形つまみをもつ。端部がほぼ垂直に落ちる。外面上部の器面調整は回転ヘラケズリである。おそらく器高が低い高台付の壺に伴うものと考えられる。

8は須恵器長頸瓶の底部で、外側に踏ん張る高台が貼り付けられている。しかし、底部が高台からはみ出すため、置くにはやや不安定である。

5は土師器壺である。1/4程度残存している。丸底で外面中程に段をもつ。口縁部外面は内湾気味に立ち上がるが、内面はそれに対応せず直線的に外傾する。

図示できない須恵器片4点の内訳は、フラスコ形長頸壺の体部が3点、大甕の肩部が1点である。長頸壺の破片は、胎土から少なくとも2個体分ある。図示したものに胎土が似た破片もあるが、同一個体とは決定できなかった。甕の器面調整は、外面がカキメで、内面に同心円状のアテ具痕がついている。器形や法量は全く不明である。

これらの土器の年代は、破片資料のため明らかでないものが多い。須恵器フラスコ形長頸壺



第48図 「越路横穴」出土遺物

は、これまでの年代観から7世紀代と考えられるが、全体の器形が明らかなものがないため、これ以上の限定は困難である。ただ、7は頸部が太く短く、比較的古い特徴を持っていると考えられる。須恵器蓋は、奈良国立文化財研究所による、消費地における土器編年の「飛鳥」に近い特徴を有している（奈文研：1979）。「飛鳥」の実年代は7世紀末～8世紀初頭とされている。土師器壺は器高が低く、口縁部が内湾気味に立ち上がるもので、東北地方南部土師器編年（氏家和典：1957）の栗団式の新しい時期のものにあたる。これまでの年代観からすると、8世紀初頭を前後する時期が考えられる。

以上から断片的ではあるが、「越路横穴」出土土器は7世紀～8世紀前半に位置付けられるものと考えられる。これはこれまで調査が行なわれた「向山横穴群」内の各横穴群出土遺物の年代観と、大きく変わるものではない。

## まとめ

- 1 大年寺山横穴群は大年寺山の東斜面と北斜面に存在する。
- 2 横穴は26基調査され、うち1基は赤彩された装飾横穴であった。また、圭頭大刀や馬具が出土し被葬者のなかにはかなり身分の高い人がいたことが推定される。
- 3 本横穴群の造営は6世紀末頃に開始され、7世紀代を通じて造営されている。
- 4 横穴は少なくとも3群に分けることができ、群中には様々な規模や形態のものが存在し、集団差や集団内の身分の反映と考えられた。
- 5 本横穴群を造営した人々は郡山遺跡と関わりあいのある人々であろう。
- 6 本横穴群の周辺には愛宕山横穴群や宗禅寺横穴群が存在し、これらは一括して「向山横穴群」と称すべきもので、これらを造営した人々は政治や経済活動などをともにし、墓域を共有していたものと思われる。